

大人数教養科目におけるオンライン授業のスキルアップ

研究代表者	竹内 綱史	(経営学部)
共同研究者	上垣 豊	(法学部)
	澤西 祐典	(国際学部)
	渋谷 亮	(文学部)
	田口 律男	(経済学部)
	手嶋 泰伸	(文学部)
	中田 裕子	(農学部)
	西川 靖二	(法学部)
	入谷 秀一	(文学部)
	畑仲 哲雄	(社会学部)
	藤原 崇人	(文学部)
	松島 恵介	(社会学部)

はじめに

新型コロナウイルス感染症の蔓延のため 2020 年度前期の授業はすべてオンライン授業となったが、十分な準備時間が取れたとは言えないなかで、各教員がそれぞれさまざまな試行錯誤をしながら授業を進めざるを得ない状況であった。そこで急遽本プロジェクトを立ち上げ、大人数の教養科目におけるオンライン授業の課題やノウハウを共有し、より効果的・効率的なオンライン授業を可能にするためのスキルアップを目指すこととなった。

当初は他大学の先端的事例から学ぶことも予定していたが、コロナ禍のためそれはかなわず、学内での課題やノウハウの共有に留まった。しかし、オンライン授業はほとんどの教員にとって全く初めての経験であったため、それだけでも極めて大きな意義があった。本プロジェクトのメンバーは全員、2020 年度の教養教育センター人文科学系科目部会構成員であり、コロナ禍に対して常に協力して対応する関係にあったが、日々の会議等だけではなかなか共有できない課題やノウハウをシェアするために、3 回の研究会を開催した。第一回研究会では前期の試行錯誤を互いに披露して、それぞれの授業改善について話し合った。第二回研究会では前期で特に大きな課題として浮かび上がった障がい学生への対応を改善するために、障がい学生支援室の方に講演してもらった。第三回研究会では、オンライン授業のなかでもっとも大変なハイブリッド型授業について、すでにそれを行った教員が報告し、課題等を話し合った。以下、それぞれの研究会の概要を述べる。

1. 第一回研究会：オンライン授業のノウハウの共有（オンライン授業の実践報告（1））

日時：2020 年 9 月 9 日（水）15 時～17 時

場所：オンライン（Zoom）

報告者：入谷秀一（文学部准教授）、竹内綱史（経営学部准教授）、
手嶋泰伸（文学部講師）、渋谷亮（文学部准教授）

2020 年度前期は急遽オンライン授業を行うことになり、各教員が試行錯誤しながら対応した。それをうけて、後期授業の開始を前に、各教員の実践報告を実施した。先端的事例

の紹介はネット上に多くなされていたが、ICT に強いわけではない教員たちにとってはハードルが高いものばかりであったので、むしろこうした現実的な悪戦苦闘の報告はとても意味のあるものだった。以下は各報告と質疑応答の記録である。

入谷報告

[授業名]

- ・ 倫理学入門（1 回生以上配当、半期 15 回 2 単位、受講生 250 名）

[授業形式]

- ・ 音声講義（20 分程度×2、3 本。mp4 ないし m4a 形式でアップ）+pdf 資料+word プロトコル

[学生への課題]

- ・ 毎回のミニ・レポート（授業内容のまとめ+質問・感想で 1000 字）を次週までに提出させた（従来の対面授業時にやっていたことと同じ）。
- ・ 質問・感想については、次週までにリプライを返した。ただし全部に答えるのではなく、抜粋した質問に対し「講評」という形で音声ファイルをアップした。と同時に、この講評を通じて、前回の授業内容について振り返り、改めてテーマや趣旨を確認した（20 分程度）。

[工夫した点]

- ・ 音声ファイルのみにしたのはデータが軽いから（20 分で 5MB 程度）。mp4 形式の方が汎用性は高いが、m4a 形式は mp4 よりもサイズがかなり小さくて済むのでこちらを使った。
- ・ 音声収録だけだとスマホなどでどこでもできるので、授業準備もやりやすかった。
- ・ 従来の対面授業を再現。学生への課題も従来通り。

[学生の声]

- ・ 課題が多すぎる。90 分で課題も含めてすべて終わるようにしてほしい。
- ・ 音声講義では巻き戻しが可能なので自分の都合に合わせて講義を受けられたのは良かった。
- ・ 動画ではなくて音声のみだと音声に集中できてよかった。
- ・ 先生の顔が見えないと授業を受けているという実感が持てず、集中力がもたない。
- ・ コンテンツが三つに分かれているため授業中バタバタしてしまっていて時間がかかる。

[今後の課題]

- ・ オンライン授業だと授業内学習と家庭学習の違いが作れず、メリハリがつかないので、対面授業と家での復習という区分けの無い形で授業を考え直さないといけないかもしれない。
- ・ 今まで通りではあったが、オンライン授業で毎回レポート 1000 字は字数が多すぎたかもしれない。
- ・ 教員の顔を見せる必要なんてないと思っていたが、学生の声をもとに、顔を出したりする工夫も考えるべきかもしれない。

入谷報告に関する質疑応答 ○質問 ●回答

○毎回 1000 字書かせるのはさすがに多すぎではないか。

●学生に自分である程度の文章を書けるようになってもらうというのが趣旨で、それが人文科目の強みだと考えているので、そういう形をずっと採ってきた。ただ、オンラインになって他の授業の課題も多くて学生が大変だという話も聞いているので、今後は考えたい。

- manaba のどういう機能を使ってどのように課題を出していたのか。
- 罫線付きの Word ファイルをアップして、そこに書かせて、「レポート」機能を使って添付ファイルで提出させていた。
- 毎回のレポートを全部読むのはとてつもなく大変ではないか。
- 前半は講義のまとめをさせているので、そこはざっと読み、質問や感想だけしっかり読む形をとった。採点はちゃんと書けているかどうかだけを見た。

竹内報告

[授業名]

- ・ 宗教学入門（1 回生以上配当、半期 30 回 4 単位、受講生 230 名）
- ・ 宗教の世界 A（1 回生以上配当、半期 15 回 2 単位、受講生 255 名）
- ・ 宗教の世界 B（2 回生以上配当、半期 15 回 2 単位、受講生 227 名）

[授業形式]

- ・ 穴埋め式のレジュメ（pdf ファイル）＋音声付きパワーポイント（pptx ファイルと動画ファイル両方）×2（前後半）。必要に応じて本などからのコピーを資料として配布（pdf ファイル）。

[学生への課題]

- ・ 数回に一回ミニレポートを課した。当初「500 字以上」にしたが、学生が大変そうだったので、途中から「300 字以上」に変えた。
- ・ ミニレポートの無い回は授業を聞いていれば簡単に答えられる「クイズ」（小テスト）を課して、クイズに全て答えていることを次のミニレポートの提出資格とした。
- ・ ミニレポートを課した次の回では多めに時間を使ってピックアップした意見にコメントを返した（従来からやっていたが、オンライン授業で他の学生の意見を聞く機会がないことを考慮して、時間を多めにした）。

[工夫した点]

- ・ 従来の授業を再現。話すスピードや内容（雑談も含めて）も対面授業とまったく同じようにした。
- ・ パワーポイントにはレジュメと同じ文章を載せたうえで、録音中にマーカーで線を引きながら話した。
- ・ 図や画像をなるべく使うようにした（教室で黒板に書くような図をパワーポイントで作成したり、教室なら OHC で映すような画像をウェブ上のフリー素材や本をスキャンしたりして用いた）。
- ・ 学生が一つの端末でレジュメと資料とパワーポイントを見る形は避けたかったので、レジュメや資料は授業前にプリントアウトさせた。コンビニのプリントサービスを使って、プリンターの無い学生も各自でプリントアウトできるようにした。
- ・ 動画は当初パワーポイントの「ビデオ作成」機能で作ったものをそのまま配布していたが、ファイルサイズが大きすぎるので（200MB 超）、途中から HandBrake というフリーソフトで圧縮するようにした（動画フレームレート（FPS）5＋音声ビットレート 96 にすると 40 分のパワポ動画で 50MB を切るくらいになる）。

[反省点]

- ・ パワーポイントに慣れていなかったこともあり、授業準備にものすごく時間がかかった。
- ・ 時間が足りなくてミニレポートの採点を授業期間中にできなかったため、学期終了後に読み直す必要があり、採点にものすごく時間がかかった。（学期中は manaba でオンライン直書きで提出させたレポートを、「一つのフォルダにまとめてダウン

ロード」し、テキストファイルを「j-txtadd」というフリーソフトで一つのテキストファイルにして読んでいた。)

- ・ レジューメと資料のサイズを A4 に統一するべきだった。
- ・ 一つの授業では「小テスト」機能を使った学期末試験をしてみたが、接続不安定などの問題が多かったし、「記号問題」と「記述問題」を別々に行うべきだった（記号問題のみなら自動で採点してくれる）。
- ・ 学生の扱いやすさを考慮して、動画はファイル共有ではなく YouTube に「限定公開」でアップしたほうが良かった。

竹内報告に関する質疑応答 ○質問 ●回答

○ミニレポートへのリプライはどのような形で行ったのか。

●パワーポイント上にピックアップした意見（よくある誤解や鋭い質問など）をずらっと並べて、ざっとコメントする形。

○YouTube を使ったほうが良いというのはなぜか。

●学生が扱いに慣れているということと、携帯会社によっては YouTube 公式アプリを使うと学生の通信データ量の制限外で使えるのが利点。あとは「倍速」で聞きたいからという声も多かった。

手嶋報告

[授業名]

- ・ 日本の歴史 A（1 回生以上配当、半期 30 回 4 単位、受講生 250 名）
- ・ 歴史学入門（2 回生以上配当、半期 15 回 2 単位、受講生 211 名）

[授業形式]

- ・ 配布プリント+Google Meet によるリアルタイム配信（パワーポイントを画面共有したうえで顔を見せて話す形）+動画配信（リアルタイム配信の録画）+録音配信（通信量を気にする学生用）。

[成績評価方法]

- ・ 半期 30 回のペア科目では、中間まとめレポート 4 回（1 つあたり 10 点）+期末レポート 60 点（もとは期末テストの予定だったがオンライン化に伴いレポートに変更）。配布プリントに講義の要点を記入させて manaba にアップさせることで、ほぼ毎回出席確認もした。出席課題は回収のみ。中間まとめレポートは締切後 1~2 日以内に採点結果と講評を公開した。
- ・ 半期 15 回の科目では第 1・9・15 回をのぞく 12 回の授業で毎回課題レポートを提出させ、1 つ当たり 10 点満点で採点し、上位 10 個の課題の合計点を成績とした（12 個すべての課題を提出しなければ合格とはならない）。課題は締切後 1~2 日以内に採点結果と講評を公開した。

[個別指導]

- ・ ペア科目では 4 回の中間まとめレポートの提出時に、Google Hangouts のビデオ通話機能を使って希望学生の個別添削指導を行った。予約日時に教員側からビデオ通話をかけ、5 分程度で改善点を伝達した。それをうけて学生はレポートを修正して manaba に再アップロードして本提出。
- ・ 毎回 135 名分の枠を設け、毎回 100~120 名程度が利用。個別指導利用者と非利用者とは、10 点満点の課題で 2 点以上の開きが出ている。
- ・ 2 回生以上配当科目では希望者がほとんど出なかったため、定着しなかった。
- ・ Hangouts は Skype などに比べてトラブルが多かったし、学生が使い慣れないツ

ールだったので多少混乱した。また、本当に利用してほしい学生ほど利用しない傾向がある。

[オンラインでのオフィスアワー]

- ・ 学生の雰囲気を知りたかったので、月 1 回程度オフィスアワーを設定し、**Hangouts** を使って希望学生と面談（雑談）をした。
- ・ 毎回 15 名分の枠を設け、毎回 10 名ほどが利用。レポートの添削指導とは違い、2 回生以上の科目でも一定程度利用者がいた。

[障がいのある学生への個別対応]

- ・ 発達障がいの学生が受講しており、オンラインでの講義のみで定期的に課題を提出するのが困難だったため、個別対応をした。
- ・ 障がい学生支援室のコーディネーターに連絡・調整をしてもらいながら、月に 1 回程度、支援室にて対面で個別指導を実施した。

[今後に向けて]

- ・ オンライン授業は全面的かつ強制的な ICT の活用であり、前向きにとらえれば、管理コストの極小化につなげられる可能性がある。
- ・ それによって浮いたリソース（時間／労力）を、不足しがちな学生への個別対応に充当できれば良いのではないか。

手嶋報告に関する質疑応答 ○質問 ●回答

- オフィスアワーの予約はどうやったのか。また、オフィスアワーを利用する学生は一般的にはほとんどいない印象だが、そんなに多くの学生が利用したのはなぜなのか。
- 全面オンラインで学生が会話に飢えていたというのはあると思う。また、授業に関係なく何でも良いから雑談しましょうと呼びかけたのが良かったのだろう。予約のやり方は、**Hangouts** のチャット機能で希望日時を書いてもらい、調整していた。
- 何でも良いから雑談しましょうという形でオフィスアワーを開放すると、授業とは全く関係ない人生相談に来る学生が大量にいたりして困らないのか。
- 1 回生は特にそもそもどこに相談に行けばよいか分からなかったりしたので、とりあえず話を聞いて、事務に行きましょうなどと誘導していた。

渋谷報告

[授業名]

- ・ 教育学のすすめ A（1 回生以上配当、半期 15 回 2 単位、受講生 195 名）
- ・ 現代社会と教育 A（2 回生以上配当、半期 15 回 2 単位、受講生 250 名）
- ・ 教育原論 A（2 回生以上配当、半期 15 回 2 単位、受講生 85 名と 122 名）

[授業形式]

- ・ 音声付きパワーポイントを動画化したもの＋パワーポイントをそのまま pdf ファイルにしたもの＋必要に応じて資料も pdf ファイルで配布。
- ・ 大学の方針が定まらない中で、すべての学生が困難なく受講できるようにすることに主眼を置いた。学期の初めに情報環境等について学生に **manaba** でアンケートをとり、上記の形式で行うことに決めた。
- ・ 音声ファイルだけのものが欲しいという要望があったので、当初は IC レコーダーで音声ファイルも作成し配布。ただ、音声だけだと言い間違い等が気になるが録り直しに時間がかかるため、途中から、動画作成後に変換ソフトで音声ファイルを作るようにした。
- ・ 最初と最後の授業だけ顔を出した動画を **Zoom** で作成し、通常は顔出しなしの動

画を配信した。

- ・ 学期の終わりごろに Zoom での録画はファイルサイズがとても小さいことに気づいたので、それを使った。
- ・ 聞く側の負担を考えて、従来の授業とは話し方を変えてフラットな喋りを心がけ、脱線も極力避けた。

[成績評価]

- ・ もともとは学期末テストをする予定だったが、manaba などでのテストは難しいと判断し、授業内課題だけで全体の成績評価をした。
- ・ 授業内課題は、ミニレポートと小テスト（小テスト中心）。課題提出締切は授業アップから 48 時間後にしたが、締め切りまでの期間が短いという声が多かった。
- ・ 小テストは授業内容に対して間違っている（or 正しい）文章を選ぶ 4 択問題を 4 問（1 問 2 点で計 8 点）。動画を見直すことを前提として難易度高めで作成したが、わりと成績は良かった（平均点は 8 点中 5~6 点）。

[トラブル等]

- ・ Google Drive へのアクセスを大学メールに限定していたが、最初はそれがうまくいかない学生が多数出て大変だった。
- ・ Google Drive での動画の変換がうまくいかず、視聴できないことがあった。
- ・ 著作権関係についてグレーな部分が多く、動画の視聴がどこまで可能か困惑した。
- ・ manaba の掲示板で質問を受け付けていたが、小テスト期間中に小テストの内容に踏み込む質問があった。掲示板だと全員に見えてしまうので、対策を考えるべき。

[今後の課題]

- ・ 学生から、学期後半でダレてしまうことや、身体的不調、一人で受講していることの心もとなさなどが寄せられた。
- ・ 講義感を増す工夫が必要。学期途中にアンケートをしたり、レポート・質問応答用の動画を別途作ったりするのは良いかもしれない。
- ・ 受講の仕方のモデルをより明確にすべき。pdf を印刷し・メモを取りながら・動画を視聴、そして動画を見直したり自分で調べたりしながら課題に取り組むというようなモデルを周知徹底すべき。
- ・ 全体的に点数が高くなりすぎてしまったので、記述課題をもっと導入すべき。
- ・ 授業収録時間の短縮化が必要。Zoom 顔出しありで一発撮りが良い。

渋谷報告に関する質疑応答 ○質問 ●回答

○一本の動画の時間はどれくらいが良いか。

●対面授業でも 90 分集中するというのは難しいと言われているが、オンデマンド方式での動画視聴なら、自分のペースで観るようというアナウンスはしていた。対面授業の場合は板書を学生がノートに取るまで待ったりしていたが、動画ではそういうことをしなかった。むしろ学生が好きな時に一時停止したりできるのは、オンデマンド方式での動画配信授業の強みではないかと考える。

全体討議 ■テーマ ・出された意見

■ 課題をオンライン提出させることでコピペが増えたが、どう対処するか。

- ・ 授業中にコピペは絶対に許さない等のアナウンスをしておいて、実際に発見したら即 0 点という対処をした。
- ・ コピペしにくい課題の出し方があるし、そういう本も出ているはず。
- ・ 出典を書いて形式上は引用の形をとりながらほぼコピペの場合はどうするか。

- ・ コピペ自体が問題というよりも、他人の見解を自分の見解として出すことが問題なので、形式が引用であろうと、そういうことをしている時点でアウトと判断すべき。
- 全部の授業が課題を出すことで学生が悲鳴を上げているという問題をどうするか。
 - ・ 学生の全体的な負担を軽減するため、課題を減らす・課題の意図を明確にする・フィードバックを多くする等の必要がある。
 - ・ 2020 年度前期は初めてオンライン授業になったことで、慣れないなかで学生が頑張りすぎている面はある。全体的に学修効果が上がっているという印象を教員は受けるが、それは学生の負担になっていることを忘れないようにすべき。
 - ・ 全体の課題量を把握することのできる部署等が必要なのではないか。
 - ・ 学生が負担に思っていることを担当教員に伝えられる仕組みを作るべき。
 - ・ もともと授業時間の倍の家庭学習が単位取得の前提となっているが、その設定にそもそも無理があるという面はある。今回の問題はむしろ、あるべき姿に近づいたとも言えるが、急激な変化が負担感の増大につながっていると思われる。
- オンライン授業でグループワークなどのアクティブラーニングは可能か。
 - ・ 今回の報告は紙ベースのやり取りが前提の授業が多かったが、授業によってはグループワークをさせることが必要な場合がある。Zoom のブレイクアウトルームでやってみたら、教員は一部屋しか見れないが、学生の満足度は高かった。
 - ・ マイクが使えない学生もいたので、今回はグループワークを諦めた。
 - ・ Google Meet を複数同時に使うことで、学生はそれぞれグループワークをして、教員はすべての部屋の音声を聞くという方法がある。全体ルーム一つとグループルーム複数と同じ時間に設定して、それぞれの学生には全体ルームと個別のグループルームの URL を伝えて、全体ルームとグループルームを行き来してもらえば良い。

2. 第二回研究会：オンライン授業における障がい学生への対応

日時：2020 年 10 月 7 日（水）15:15 - 17:15

場所：オンライン（Zoom）

講演者：小松智子（障がい学生支援室コーディネーター）

講演タイトル：「大講義オンライン授業における障がい学生への合理的配慮

～前期の事例から～」

2020 年度前期の経験で、受講生の多いオンライン授業では障がい学生への合理的配慮がことのほか難しいケースが多々あることが分かっていた。そこで、障がい学生支援室からはどのようなサポートがあるのかを知るとともに、オンライン授業ではどのようなことに気をつけるべきなのかを検討するために、講演会を実施した。以下は講演概要と質疑応答の記録である。

講演概要

大学における障がいのある学生の人数は近年増加しており、本学でも 2015 年から 2019 年の 5 年間に約 2.4 倍になった。なかでも発達障がいのある学生が急増している。障がい学生支援室ではそういった学生も含めて多くの障がいのある学生の修学支援及び大学生活の支援を行ってきたが 2020 年度前期がオンライン授業になったことで、新しい課題がさ

まざまな形で浮き彫りとなった。オンライン授業は、通学負担の軽減や学生のペースで授業を受けられる点などから、障がいのある学生本人からは良いという意見もあったが、授業形式の多様化による混乱やすべてが自己管理のなったことなどによって、単位取得に困難をきたす学生もいた。コロナ禍で障がい学生支援室の活動も制限され、オンラインでの支援には限界があった。

発達障がいとは、何らかの理由で脳機能の発達に偏りが生じたことによる障がいであり、LD（学習障害）・ADHD（注意欠陥／多動性障害）・自閉症スペクトラムなどが含まれる。得意・不得意の特性と、その人が過ごす環境や周囲の人との関わりの中で社会生活に困難は発生することがある。またこの周囲の無理解や不適切な対応によっては、障がいが複雑化することや二次障害が生じてしまうこともある。また、診断名は同じでも個々に違う状態を表すことも多くあるため、発達障がいのある学生への対応はそれぞれの個性や特性に応じた支援が必要になる。

なによりも不安の軽減や環境調整はとても重要で、この環境調整はセルフコントロールやソーシャルスキルを身に着けるための素地ともなる。

オンライン授業における環境調整のためには、授業担当者の話すスピードの意識（早口にならないこと）や資料のどこを進んでいるなど、進度が分かっているかの確認が必要となる。また、質問方法、困ったときの連絡先の明示や、課題の提出期限はできれば視覚情報として示すことも重要な環境調整となる場合が多い。その他、課題の提出方法は手順を追って伝えるなどの工夫が望ましい。

教員の負担に関しては、教務課や障がい学生支援室と情報を共有し、連携・協働することによって、軽減できることも決して少なくはないと思われる。

2016 年 4 月に施行された「障害者差別解消法」では障がい者に対する「合理的配慮」を定め、障がい者の個々の状況に応じて、社会的障壁を除去することを求めている。この「合理的配慮」の留意点として、教育の目的・内容・評価の本質を変えないという原則のもと、障がいのある学生に必要な教育が提供できているかの観点で評価したい。

合理的配慮についての学生本人の申し出については、教務課や障がい学生支援室が、配慮の「できる・できない」を判断するのではなく、考えられる合理的配慮の方法とともに、まずは申し出のままを教員に伝えるものである。必要に応じて教務課や障がい学生支援室とも相談の上、できる配慮、できない配慮について、実際に授業を担当する教員の判断に委ねるものであることをご理解いただきたい。

質疑応答 ○質問 ●回答

- 支援が必要な学生のネット環境の調査はしているか。
- 全体の調査はしていない。必要があれば個別に尋ねることで対応している。
- 障害のある学生たちは manaba の機能は使いこなしているか
- できない学生も多い。個別に教務課や先生方につないで指導をお願いしている。
- 教務課などとの連携がうまく取れていない場合があるのではないか。
- コロナ禍でうまくできないこともあったと思う。改善したい。
- 個別対応には電子メールを使う方がよいのか。
- 学生によっては、メールがハードルになる場合もある。manaba においても、他学生にも見えてしまうと敬遠する学生もいる。個別に質問できる方法があれば望ましい。
- 支援室では人手が足りていない印象を受ける。教員補助員や TA、ライティングサポートセンターが使えるのではないか。
- ライティングサポートセンターには、すでに連携の中でお世話になっているケースがある。障がいの状況によって学生にお願いできないケースもあるため、個々のケース

に応じて慎重にすすめている。

3. 第三回研究会:ハイブリッド授業のノウハウの共有(オンライン授業の実践報告(2))

日時: 2021 年 2 月 25 日 (木) 13 時~16 時

場所: オンライン (Zoom)

報告者: 中野寛之 (法学部准教授)、手嶋泰伸 (文学部講師)、
牛根靖裕 (本学非常勤講師)、井上善幸 (法学部教授)、
竹内綱史 (経営学部准教授)

2020 年度後期は対面授業が部分的に再開されたが、学生から「合理的配慮願」が出された場合は、対面授業と同時にオンライン配信をする「ハイブリッド授業」が必要となった。だがハイブリッド授業は単なるオンライン授業よりもさらに困難が多く、ほとんどの教員が初めての経験だったこともあり、さまざまな問題が生じたが、担当教員がそれぞれ個別に対応せざるを得なかった。しかしコロナウィルスの状況によっては 2021 年度もハイブリッド授業が必要とされることが大いにあり得ることが予想される。それゆえハイブリッド授業の課題やノウハウを共有しておくことは非常に重要であったことから、本プロジェクトでは後期授業終了後にハイブリッド授業の実践報告会を開催した。以下はその報告と質疑応答の記録である。

中野報告

[授業名] 時間と空間の科学 (1 回生以上配当、半期 15 回 2 単位、受講生 247 名)

[授業前の経緯]

- ・ SD (ソーシャルディスタンス) 定員では割り当てられた教室には入らない学生数だったが、対面授業を増やしたいという教学部の要望によって、学期初めからハイブリッド授業となった。
- ・ どのように学生を対面とオンラインを分けるかが問題となり、学籍番号の奇数・偶数で分ける等があり得たが、manaba でアンケートをとったところ、希望はちょうど半々くらいだったので、対面出席希望者を全員対面とした。
- ・ 当初は学籍番号による座席指定が想定されていたが、教学部のサポートを得て、初回は学生に好きなところに座ってもらい、以後、その席を指定席として使ってもらう形にした。

[授業形式]

- ・ Google Meet でパワーポイントを共有している画面をそのまま教室のスクリーンに映写して授業。ノート PC 内蔵カメラを使って教員の顔が小さく映る形。
- ・ 大講義なので双方向ではなく一方向型で配信 (Google Meet のライブストリーム) する形にした。ライブストリームのリンクを manaba に掲示して、リアルタイムのオンライン受講者はそこから授業を受けた。
- ・ 黒板をたまに使ったが、大きく文字を書けばノート PC 内蔵カメラでも読めるように映すことができた。
- ・ ライブ配信がちゃんとできているかを確認するための iPad を 1 台、授業中の受講生からの連絡を確認するための iPad (メール・manaba・twitter を常時確認) を別に 1 台用意した。
- ・ 教室の WiFi が弱かったので、自分のポケット WiFi を使って授業をした。

- ・ ライブストリームを録画したものを、編集せずにそのままオンデマンド用に利用。
- ・ スライドを使っている授業の場合は、ほぼ普通の対面授業となる。

[気をつけた点・気づいた点]

- ・ オンデマンドのための録画は念のため授業 5 分前から開始するようにした。
- ・ 授業が録画されていることを受講生に周知することは必ず必要（学生が話している声もすべて残ってしまうことを注意喚起）。
- ・ 対面授業では簡単な実験を教室で行っていたが、ハイブリッド授業ではそれができなかった。
- ・ 使った教室（21 号館 6 階）は換気の関係でハイブリッド授業がしにくかった。
- ・ 最終回は対面 10 名、ライブ視聴 6 名。残りはオンデマンド視聴だった。

中野報告に関する質疑応答 ○質問 ●回答

- 実験をするのが難しいというのは、手元を映すのが難しいということか。
- ビデオカメラを使ったり補助としてカメラマンについてもらったりしてもらわないと無理だった。
- 実験ができない分はどのように補ったのか。
- ネットに上がっている動画を紹介したり、スマホアプリを活用したりした。
- 21 号館の教室は環境的にまだマシではないかと思うが。
- そうかもしれない。ただ、スライドを映写するためには部屋を暗くする必要があるが、コロナ対応で換気する必要があるため窓を開けなくてはならず、そうすると風が強くてカーテンがまくりあがり、とてもやりにくかった。
- Google Meet の双方向ではなくライブストリームを使ったのはなぜか。
- 大人数講義なので双方向にするとトラブルが起きるのではないかと危惧した。
- 最終的に 10 人しか対面授業に来なかったことは、どう考えるべきか。
- もともと大講義で授業中に学生から発言があったりはしないので、その点は問題がなかったし、毎回の課題は例年よりも質が高いくらいだった。また、最後に残った 10 人はとても熱心な学生で、その 10 人を見出せたことは嬉しかった。
- 初回を自由席にしてそれをその後の指定席とするという対応は、例外的ではないか。
- 教学部からの要望で急遽ハイブリッド授業を行うことになったので、手厚いサポートを得られたが、今後もそれが続くことは想定しないほうが良い。

手嶋報告

[授業名] 日本の歴史 B（1 回生以上配当、半期 30 回 4 単位、受講生 179 名）

[授業前の経緯]

- ・ 当初は完全オンラインの予定だったが、1 回生の対面授業が少ないことから学期初めに教学部からハイブリッド型授業を打診され、承諾。
- ・ パワーポイントを用いた講義をもともと用意していたので、主観的には、授業形態に大きな変更はなかった。
- ・ 最初はノート PC のみ大学から借りたが、あまりスペックが良くなく、準備に時間がかかったので、学期途中から自前のタブレット PC を用いることになった。
- ・ 週二回月 3 木 3 のペア科目なので、当初教学部からは受講生の半分を月 3 対面にしてもう半分を木 3 対面にする（受講生はそれぞれ対面ではない曜日はオンライン受講）という案が示されたが、manaba で学生の意向調査を実施した。
- ・ 意向調査は manaba の「レポート」機能を用いた。「アンケート」機能では学生への個別返答が難しいので、「レポート」の個別指導機能を用いた。レポートへの「評

価」欄を使って、割り振り結果を通知した。

- ・ オンライン・対面のどちらで参加するかはいつでも変更可能とし、変更があった場合はそのつど座席表を更新した（教学部を通じてではなく自分で更新）。
- ・ 発達障がいなどで合理的配慮が必要となる場合は、無条件で対面・オンラインの両方に参加可能とした。

[授業形式]

- ・ **Google Meet** を用いてのリアルタイム配信 & オンデマンド配信（講義時に録画）。
- ・ 授業はパワーポイントを用いての講義。ノート PC に外付け Web カメラ（マイク付き）を接続して教員を映した。
- ・ Web カメラはケーブルを目いっぱい伸ばして席の最前列に配置。そこであれば声もきれいに拾ってもらえた。
- ・ バックアップとして、サポート要員に iPad を用いて録画してもらいつつ、IC レコーダーで音声も録音。2 回ほどトラブルがあり、音声録音を公開した。
- ・ 成績評価の条件をできるだけ平等にするため、中間まとめレポート（全 4 回）の作成ワークショップと学期末課題の説明はオンデマンド配信のみ。授業ガイダンスと総括もオンデマンド配信のみで実施したので、対面講義は全部で 19 回だった。
- ・ 対面・リアルタイム配信・オンデマンド配信の 3 形態で受講可能だったので、講義中に出席は一切取らず、期限までに出席確認シートを **manaba** にアップしてもらうことで確認。2 日程度の期限を設け、遅れた場合は遅刻として処理。
- ・ プリントは **manaba** にアップロードし、必要ならば各自印刷してくれるように指示（感染拡大防止のため）。多くの学生は印刷してメモ、ノート PC でメモを取る者もいた。講義動画を期限なしで公開していたため、メモを取らずに授業を受けていても、動画を何度も見直して課題を作成する者もいた。
- ・ 対面授業への参加はあくまでも任意とした。体調が少しでも悪ければ自宅で療養しオンラインで受講するよう何度もアナウンス。
- ・ 中間まとめレポートはワークショップの時間 + α で個別添削指導を実施。Gmail のチャット機能と **Google Meet** を使ったビデオ通話が基本、一部紫英館 1 階ロビーにて対面でも実施。

[気をつけた点・気づいた点]

- ・ 教室ごとに環境が異なり、大学が用意していた統一マニュアルでは対応できないことがあるので、注意すべき。
- ・ **Google Meet** の録画トラブルは必ず起こるので、バックアップが必須。ただ、パワーポイントの資料を別で公開していれば、バックアップは IC レコーダーで録音した音声だけで問題ないと思われる。
- ・ 全受講生にオンデマンド配信を保証すると、対面およびリアルタイムでの受講者数が少なくなることは必至。もしリアルタイムを前提とした講義を計画するのであれば、オンデマンドでの受講は合理的配慮願を出した学生や体調不良で欠席する学生に限らないといけない。
- ・ 対面・リアルタイム配信・オンデマンド配信の受講で、成績に差は認められない。対面にこだわる必要はなく、ローコストで多様な受講形態の保証ができるのであれば、そのほうが学生の利便性および成績の向上につながる。
- ・ 受講生の大半は録画を極めて有効に活用し、年度当初に想定していたよりもはるかに高度・緻密・長文のレポートを作成してきた。オンデマンド配信には確実にメリットや可能性が存在するので、今後は、単にリアルタイム受講ができなかった場合の「保険」としてではなく、「高い学習効果を生むツール」として活用できるの

ではないか。授業にもよるが、対面にこだわる必要はそれほどないのではないか。

- ・ 学生に話を聞くと、オンライン授業の「受講のしやすさ」は、課題の少なさではなくて、講義視聴および課題作成の取り組みやすさにあるようである。学生のストレス要因になっているのは、講義動画へのアクセスの悪さ、manaba での説明の少なさ、質問へのレスポンスや提出物へのフィードバック公開の遅さ、課題の指示の曖昧さなどである。

手嶋報告に関する質疑応答 ○質問 ●回答

○ノート PC と Web カメラの配置をより正確に教えてほしい。

- 最前列の席と教壇との間に長机を置いて、そこにノート PC を置き、そこからコードをのばして最前列に Web カメラを置く形。なるべく学生の席から見た映像を映したかったのもそういう形にした。

○質問へのレスポンスの遅さが学生のストレス要因だという話は他でも聞くが、大人数講義ではなかなか難しいところがある。具体的にどうされていたかを教えてほしい。

- 私は Google のチャット機能を LINE 感覚で使っており、学生から何か書き込みがあればすぐに返答するようにしている。毎日一つや二つは書き込みがあった。出席課題については基本的にレスポンスしていないが、答えるべき質問があれば次の授業の冒頭で返答するようにした。中間レポート等は 1 週間の提出期間中に提出されたものから次々採点して、提出締切の数時間後には採点と講評を全て公開できるようにしている。

牛根報告

[授業名] アジアの歴史 B (1 回生以上配当、半期 30 回 4 単位、受講生 84 名)

[授業前の経緯]

- ・ 学期当初は完全オンラインだったが、第 7 回 (10/15) から、教養教育センターの要請で対面へと変更になった。しかし、合理的配慮願を出した学生がいたので、対面とオンデマンドを中心としたハイブリッド授業となった。
- ・ 対面への切り替えは manaba で学生に周知をしたが、多少の混乱があったものの、基本的にはほぼ全員が対面授業受講可能ということになった。
- ・ 当初は学期を通じてオンデマンド型の予定で準備をしていたことと、使用機材と通信環境が不透明だったことから、ライブ配信はしなかった。
- ・ ノート PC は自分のものを使い、会議用スピーカフォン (eMeet Luna) を大学から借りて授業を行った。

[授業形式]

- ・ 対面への切り替え前のオンデマンド型授業では、講義レジュメ (pdf) ・音声付きスライド動画 (mp4) ・スライド資料 (pdf) ・音声ファイル (mp3) を Google Drive にアップして共有リンクを manaba に掲示する形で実施していた。
- ・ 対面への切り替え後、教室では座席は決められた座席表に従って着席してもらった。トラブルはなかった。
- ・ 対面授業参加者には印刷したレジュメを配布 (教室の一番前に置いておき、それぞれ取ってもらう形)。
- ・ スライド資料をスクリーンに投写して授業。従来からあまり板書はしていない。
- ・ 当初、換気のため窓と扉は常時開放していた。寒くなってからは 30 分ごとに 5 分ほど開けることにしていたが、話しているうちに忘れてしまうことがしばしばあった。
- ・ 対面授業の音声をノート PC で録音した。当初は Google Meet や Zoom を利用し

て、スライドを映しながら講義音声を録画していたが、録画終了後は mp4 に変換するためにインターネットに接続したまま 5~15 分ほど時間が必要だが、接続が不安定で難しかったし、次の授業のために授業後にすぐ退室する必要があるため、録画は断念した。

- ・ 授業後に講義レジュメ(pdf)・スライド資料(pdf)・音声ファイル(mp3)を Google Drive にアップして共有リンクを manaba に掲示することでオンデマンド配信とした。学生には授業日のうちにはアップすると案内していたが、実際は授業終了後 1 時間程度でアップすることが多かった。
- ・ 出席管理は manaba 上で respon を使用。出席登録期間は 1 週間とし、音声の公開も 1 週間のみとした。対面授業参加者も出席管理は respon で実施。そのため遅刻に関しては今回は一切考慮しなかった。
- ・ 質問の受け付けは、対面での対応のほか、respon やメールで対応した。manaba の掲示板の利用も通知したが、技術的なトラブル以外では利用者はいなかった。

[気をつけた点・気づいた点]

- ・ 印刷したレジュメをそれぞれ取って行かせるのは感染防止の観点からは配慮が足りなかったかもしれない。
- ・ 換気については授業担当者以外の人時間がとに窓等の開け閉めをしてくれたほうが良い。
- ・ オンデマンド方式での授業資料公開と 1 週間の出席登録期間に加えて、防疫と健康管理を優先する旨を案内したためか、対面での出席者は多くはなかった。10 月中は 40 名前後だったが、1 月には 10 人未満となった。respon への出席登録は、当日 15%、3 日以内 25%、4~6 日目が 40%、締め切り直前が 5%くらいの印象。
- ・ 学生からの反応と成績に関して、対面とオンデマンドで受講生の差はなかった。
- ・ 対面での受講生の少なさは、ちょっとした疑問を手軽に質問したい学生の減少に比例していた。質問の受け付け方には工夫が必要だと思われる。
- ・ オンライン授業に関しては、大学・教員・学生のそれぞれの利用環境に依存するため、すべての状況に対応するには教員 1 人では不可能。
- ・ オンライン授業では、映像資料などを利用することが、権利的にも技術的にも、非常に困難だった。歴史の授業をするにあたってはとても大きな問題。一度、VHS の映像を教室で投写するとともに、デジタルダビングして制限を設けて YouTube にアップして受講生に公開したが、視聴率はとても悪かった。教室では受動的にでも学生に観させることが可能だが、能動的に観てもらうことは難しいと感じた。
- ・ ハイブリッド授業では、オンデマンドで任意の時間に受講できる対応をすると、対面出席者は徐々に減少する。対面授業での出席を学生に強く求めるのであれば、対面で得られる学修上の利点をはっきりさせる必要がある。

牛根報告に関する質疑応答 ○質問 ●回答

- オンライン授業での映像資料の権利的・技術的な扱いが大きな課題となっていることは会議等でも話題になっているが、それとは別に、対面授業では教室にいれば特に興味が無くても映像を見せられてそれで興味を持つようになるということが起こるけれども、オンライン授業だと興味が無いものはそもそも見ようもしないということになりがちで、そこが問題だという指摘はとても重要だと思われる。特に教養の授業では興味をあまり持っていない学生をこちらに振り向かせることが必要で、あらためて色々と考えなければならぬのではないかと。
- それは映像資料だけの問題ではなく、教室にいればその場の雰囲気や体験できること

があるというのは対面授業の一番のメリットだが、オンライン授業の場合は、興味を持って受講する学生と単位のためだけに受講する学生との差がより一層激しくなったという印象がある。

○Google Meet や Zoom で動画ファイルに変換するのに、ネット接続を繋げたままに必要はないのではないか。

●何度か失敗したので、そういうことだと理解している。

○PC に動画を保存するのではなく、クラウド上に保存するオプションを選択すれば、動画化は勝手にやってくれるので、ネット接続を切っても問題ない。ただし、Zoom の場合は無料版ではクラウドに保存できないので、注意が必要。

井上報告 *数多く開講されている「仏教の思想」全体についての報告

[授業名] 仏教の思想 (1 回生必修科目、半期 15 回 2 単位、1 クラス 100 名以下)

[授業前の経緯]

- ・ 当授業は 1 回生全学必修科目で、講義概要・到達目標・テキストは統一。講義の方法は各担当教員に任されている。
- ・ 学期当初はすべてオンライン授業だったが、第 4 週目から大学の方針に従い、対面授業に移行。合理的配慮願を出した学生がいたクラス (全体の 1/4 程度 (深草 12 クラス・瀬田 5 クラス)) はライブ配信またはオンデマンド配信でのハイブリッド授業となった。

[授業形式]

- ・ ハイブリッド授業では、オンデマンド形式の先生とライブ形式の先生がいた。
- ・ オンデマンドの場合は、対面講義で用いたパワポ資料と講義音声配信するパターンと、前期同様オンライン講義用資料 (パワポに音声・動画を組み込み) を配信するパターンがあった。出席や課題は manaba を活用し、締め切りは対面授講生とオンライン受講生で分ける場合と同一にする場合があった。配布資料は対面とオンラインで同一の場合が多かったが、別途作成した先生もいたようである (もともと全面オンラインの予定だったのであらかじめ作成していたらしい)。
- ・ ライブ配信形式の場合は、教卓の前の席にパソコンとカメラを設置し、オンラインの学生を Google Meet でつないで、授業をリアルタイム配信した (Meet で同時に録画も行った)。課題等は対面・オンライン問わず同様の締切とした。配布資料は前日までに manaba に掲載し、対面・オンライン共に学生が各自で閲覧する形。
- ・ 成績評価は、従来は全クラスで定期試験を行っていたが、今期はそれが難しかったので、各担当教員にまかされる形となった。毎回の課題提出等によって理解度を把握して成績評価する場合が多かったようである。
- ・ 対面講義受講生の欠席者には、オンラインコンテンツを視聴してもらい、出席扱いとはしないものの、課題等の提出で一定程度評価するという対応をした。欠席に関する証明書を提出した学生には従来通りの対応となったが、体調不良等による自宅待機についても同様の対応をとった。

[工夫や問題点]

- ・ オンデマンド形式の場合、もともと予定されていたオンライン講義の資料を活用することができた。音声データは適宜切り分けて録音し、パワポ資料との関連が分かりやすくなるようにする工夫もあった。
- ・ ライブ配信では、板書は書画カメラを用いると見えやすいという話があった。また、対面授講生に配信と同じ動画を見せる際には、反転修正ツールが必要とのことである。なお、ライブ配信の際の機材操作等については一定の理解と習熟が求められ、

サポートが無いと難しいという声があった。

- ・ 配布資料は事前に配信しておいたほうが良い。
- ・ 「仏教の思想」は原則対面だったが、対面とオンラインを学生が選択できる科目が他にあるので、「仏教の思想」でも選択させてほしいという希望が寄せられるケースがあった。しかし、あくまで合理的配慮願を出した学生だけがオンライン受講できるという対応になった。
- ・ 成績に関しては対面・オンラインで特に差は生じない。

井上報告に関する質疑応答 ○質問 ●回答

○対面の受講生とオンラインの受講生の両方に同じ課題をオンラインで提出させる場合、対面受講生に授業中にオンラインで課題提出させるのは難しくないか。

●授業中にスマホを使っても構わないことにして、事前に課題を課することを告知しておき、授業内で課題のための時間をとれば、学生は問題なく提出できる。

竹内報告

[授業名] 大学論（2 回生以上配当、半期 15 回 2 単位（リレー講義）、受講生 109 名）
[授業前の経緯]

- ・ 5 人の教員によるリレー講義で、私（竹内）の担当は第 11～14 回だった。
- ・ この科目は学期当初は完全オンラインだったが、途中から対面に変更。しかし「合理的配慮願」を出した学生がいたため、ハイブリッド対応となった（対面かオンラインかを全受講生がそれぞれ選択できる形）。
- ・ 私以前の担当者から、対面を受けに来る学生は 10 名程度しかおらず、オンラインにリアルタイムとオンデマンドを用意するとほとんどの学生はオンデマンド方式を選択していると聞いていた（リアルタイム配信にはほとんど需要がなかった）。
- ・ コロナ以前に教室でやっていた授業（紙のレジュメを配ってときどき板書を使って話す形）をそのまま配信する、という方針で準備を進めた。
- ・ ノート PC 内蔵カメラや外付け Web カメラ等では、黒板を綺麗に映すことは難しく、ビデオカメラを使わないと無理だろう、というのがメディアセンターの見解だった。しかし、ビデオカメラでリアルタイム配信するためには、PC にビデオカメラを Web カメラとして認識させるための特殊な機材（キャプチャーボードなど）が必要だが、それが無いし、学期中で準備時間が取れないことから、リアルタイム配信は断念し、オンデマンド配信での対応となった。

[授業形式]

- ・ 対面授業をビデオカメラで録画し、授業後にそのデータを YouTube に「限定公開」でアップし、URL を manaba に載せる、というオンデマンド形式のハイブリッド授業となった。カメラマンはサポート要員にお願いした。
- ・ 資料は授業前に manaba にデータをアップし、対面授業参加者には紙でも配った。
- ・ ビデオカメラは大学から借用。ただしマイクロ SD カードは自前。

[気をつけた点・気づいた点]

- ・ 1 回の授業でデータが 1.7GB くらいとかなり大きいのが、YouTube を介すとデータを勝手に圧縮してくれるし、学生側（視聴する側）で画質の調整もできるので、学生の負担にはならない。ただ、SD カードから PC にデータを移し、それをアップするのは少し時間がかかった（1～2 時間）。
- ・ 100 名以上の登録だが対面授業参加者は 10 名程度で教室はガラガラだったため、座席指定にこだわらず前に座りたい学生はソーシャルディスタンスを保ったうえ

で座っても良いとした（2 名くらい前に座った）。

- ・ あらかじめカメラマンに板書した際はしばらく黒板をアップしておくように伝えておき、オンラインでの板書の見やすさに心がけた。

[学期終了後の試行]

- ・ 学期終了後にいろいろ試してみたが、スライドではなく板書を使う授業をリアルタイム配信する場合は、ビデオカメラ+キャプチャーボードを使って YouTube Live でリアルタイム配信するのがベストではないかというのが今のところの結論。
- ・ ビデオカメラには（当然ながら）録画機能があるので、バックアップ用に同時に録画もできる。ズーム機能もとても便利。しかもノート PC を教員の手許に置いたまま授業できる（HDMI の延長コードは必要）。
- ・ 外付け Web カメラでも、画質が悪くないものを使えば、黒板を綺麗に映すことができる。ただし、カメラだけでは画像を確認できず、USB 接続だと（給電の関係上）あまりコードを長くできないので、カメラの横にノート PC を置く必要がある（教員の手許に PC を置けない）。音質があまり良くないので（Web カメラの性能にもよるだろうが）、別で入力用マイクがあったほうが良いかもしれない。
- ・ ノート PC 内蔵カメラでも黒板を映すことは可能だが、その場合は黒板を使うのはあくまで補助（メインはパワーポイントなど）という形になると思われる（ノート PC の性能とかにもよるかもしれない）。
- ・ YouTube Live を使う利点は画質が良い（画質調整は勝手にやってくれる）ことと学生が使い慣れていることだが、配信準備に少し慣れが必要。Zoom や Google Meet の方が配信する側としては使いやすいかもしれない。

竹内報告に関する質疑応答 ○質問 ●回答

○オンライン受講を（合理的配慮願を出した学生に限定せず）受講生全員に OK とすると、対面講義出席者が極端に減るということだが、その場合、授業をする側の気持ちはどういうものなのか。

●ガラガラの教室で授業するのは少し残念な気持ちもあったが、その状況であえて対面授業に出てくるのは熱心な学生が多く、それほど気にならなかった。

全体討議 ■テーマ ・出された意見

■ Google Meet など画面共有しているものを教室スクリーンで映す際の問題点。

- ・ 教室によってはスクリーンがとても見にくい部屋がある。
- ・ ソーシャルディスタンスのために座席指定になっても、目が悪い学生を強制的に後ろに座らせるようなことにならないようにしないといけない。

■ 対面授業の代替措置としてではなくオンライン授業独自の利点。

- ・ 授業の内容によるので統一化する必要はないし、「オンラインを活用」というマジックワードで物事を進めるのは混乱をもたらす。しかし、授業によってはオンラインに向いている場合もあり、活用する可能性は大いにある。
- ・ 2021 年度はまだ緊急避難的にオンライン授業やハイブリッド授業を使うことになるが、2022 年度以降は積極的に活用するという議論はすでに始まっている。
- ・ いずれにしろ映像や資料の著作権の問題がとても大きなネックになるのでは。
- ・ 学生の反応を見ながら授業をすることを考えると、対面が良い。特に大講義では、何通りもの説明の仕方のうち、学生の反応を見ながらいくつかの説明を選んで用いるということが必要で、全面オンラインは無理があるのではないかと。

■ 学生の PC 環境の問題。

- ・ スマホだけで受講するというのは避けられないのか。学生に必ずノート PC を持たせることはできないか。
 - ・ 大学は学生に自分のノート PC を持つよう「推奨」しているが、「義務」とするのはまだ無理があるのではないか。
 - ・ 現状では授業動画はスマホでも観られることを前提にせざるを得ないので、資料等は必ず印刷して手もとにおいて授業を受けるように指示したほうが良い。
 - ・ 教室にビデオカメラを常備するということもあり得るのではないか。それがあれば学会等でも活用できる。
- ハイブリッド授業は対面とオンラインを全学生が選べるようにするべきなのか。
- ・ どちらか選べる方が学生にとっては良いのは間違いないが、逆に、選べるようにしないと学生からは今後は「不親切」に見えてしまうのではないか。
 - ・ 少なくとも 2021 年度に関しては、対面授業で学生から合理的配慮願が出た場合のみ、ハイブリッド対応となっている。ただし、ハイブリッド対応をすることになった際、配慮願を出した学生以外にもオンライン受講を認めるかどうかは担当教員の裁量になるだろうが、大きな分かれ目になることは確か。

おわりに

2020 年度のオンライン授業では、多様な学部・学年にまたがる学生の受講する教養科目の、特に大講義においては、毎回の授業の進め方・課題の出し方・学生のケアの仕方・採点の仕方などについて、種々の問題が次々と発生したが、各教員は多忙を極める中でその都度対症的に対応するしかなかった。2021 年度も一部の大講義はオンライン授業をせざるを得ない現在の状況のなか、各教員が直面した課題の共有と、その最適な解決方法を探究することは極めて重要であった。特に、障がいのある学生への対応と、ハイブリッド授業のノウハウを共有できたことは、今後に向けて非常に有益だったと言える。さらに、オンライン授業だからこそ可能な学修効果を確認しておくこともできたので、アフターコロナの大学教育に生かすためにも、大きな成果をあげることができたのではないだろうか。

(文責：竹内綱史)